

## 思いを繋ぐ

沖縄県立開邦中学校三年 安仁屋 紫月

六月二十三日、慰霊の日。私は沖縄県民として、毎年、この日を特別な思いで迎える。平和を願い、戦争を憎みあの悲しみに満ちた沖縄戦を風化させない。それが、私たち世代に課せられた使命であると思うからだ。私の曾祖父母たちが体験した戦争はどのようなものだったのか、どのような思いを抱いたのか、私はそれらを受け止め、繋いでいきたい。

私には、九十二歳の曾祖父が宮崎県にいる。夏休みなどを利用して、母の実家、宮崎に遊びに行けば優しい笑顔で迎えてくれる曾祖父。曾祖父は、七十三年前に長崎県佐世保市の日本海軍にいた。昭和二十年、当時十九歳だった彼は、足が速く運動能力に優れ、健康だったことから、特別陸戦隊へ召集された。特別陸戦隊とは、海軍でありながら必要に応じて地上戦部隊にもなる戦闘部隊のことである。曾祖父は海軍に憧れがあったようだが、軍艦に乗ることなく、陸上で戦闘訓練をしたり、空襲警報が鳴れば軍港周辺を警備したりする日々を過ごしていた。友の戦死の知らせを聞きながら、若く健康な自分がなぜ戦地へ行かされないのか不思議だった。「本土決戦に向けて温存されちよつたのかもしれないなあ」とも思う。昭和二十年六月二十九日の佐世保大空襲では、壊滅状態となって軍港都市を前に漠然と「日本は負ける」と感じた。そして同じ年の八月九日午前十一時二分、長崎市に原子爆弾が投下された。九十キロほど離れた佐世保にいる曾祖父にもその光が見えたという。十五日の玉音放送を聞いた時、「ああ、終わったんやな。」という脱力感と共に、「自分は何も出来なかった。」という罪悪感が残った。地元の幼馴染みは何人も戦死し、ある者は特攻隊として沖縄の海で若い命を散らした。沖縄へ行った兄は、どこで亡くなったのかも分からない。私が沖縄の平和の礎で撮影した曾祖父の兄の名前を見せると、曾祖父は喜び手を合わせて「ありがとう」と言った。

私は、沖縄の曾祖母のことを宮崎の曾祖父に話した。曾祖母は、沖縄が「鉄の暴風」にさらされる最中、首里から糸満へ逃げ生き残った中の一人である。しかし、逃げる途中、目の前で母が爆弾にやられ亡くなった。十四歳の曾祖母は、母の亡骸をどうすることもできず、その場に埋葬するしかなかった。「自分もすぐにそっちに行くからね」と涙も出なかった。戦後しばらくして、曾祖母はリュックを背負い、戦争中の逃げた

道をたどって再び何日も歩き、母を埋葬した場所を探し当てた。掘り起こした骨は、全てリュックに詰めて持ち帰り弔ったのだ。この話の間、曾祖父は話を聞きながら何度も頷いた。「沖縄は本当に大変やったなあ。すまんかったなあ。」と表情を暗くし、手元を見つめた。しばらく沈黙したあと、顔をあげると「でも、お互い生きちよつていがあったわあ。紫月が生まれてきてくれたんやかいなあ。」と曾祖父は、私を見つめながらまた頷いた。

私は、二人の助かった命があったからこそ、生まれることが出来た命なのだ。それを強く実感する。今生きていることに、家族や友達とのごくありふれた日常に、夢を目指して学べることに、感謝する。逆に言えば、奪われた多くの尊い命と共に、生まれることの出来なかった数多くの命があり、叶わなかった夢がある。戦争が生み出すものは、絶望と悲しみばかりだ。摩文仁で、亡くなった母の名に手を合わせて静かに涙を流す曾祖母。大好きなお母さんと生まれ育った家、友との楽しかった思い出や描いていた夢。私は、曾祖母が沖縄戦によって奪われたものの大きさを知り、心から戦争を憎いと思う。そして今もなお、二人を苦しめている戦争の呪縛から解放放つてあげたいと思う。そのために私に出来ることは、曾祖父母の思いを分かち合い、生き延びてくれたことへの感謝を伝え、繋がれたこの命を精一杯に生きることである。

六月。緑は生命力あふれ瑞々しく、生温かく吹きつける南風を受け止めるように、大空に向かったて両手を広げたくなる初夏。海は眩しいくらいにキラキラと日差しを反射し、私は小さなかわいい生き物たちをその中に見つける。波に手足を浸せば、心地よい冷たさを感じて、水しぶきを掛け合っては、友とはしゃぎ、歓喜する。きつと、幼き日の曾祖母も見たはずの光景。この沖縄が、最も輝き始める季節に起きた七十三年前の「沖縄戦」。私は、その実相を知る一人として、思いを繋いで生きていく。